

平成 30 年 4 月 10 日

平成 30 年度病害虫発生予察特殊報（第 2 号）

和歌山県農作物病害虫防除所

1. 病害虫名：ビワキジラミ *Cacopsylla biwa* Inoue
2. 作物名：ビワ
3. 発生地域：日高郡由良町
4. 発生確認の経過

平成 29 年度農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業の一環として、平成 29 年 8 月から日高郡由良町のカンキツ園脇の無防除のビワ樹に黄色粘着トラップを設置して発生調査を行ったところ、同年 11 月下旬に本種とみられるキジラミ類の雄成虫 1 頭の誘殺が確認され、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹茶業研究部門（農研機構）によりビワキジラミと同定された。その後 12 月から本年 2 月にかけて同地に設置した黄色粘着トラップに数個体の本種成虫が誘殺されたものの、ビワ樹上では幼虫の発生は確認されなかった。平成 30 年 3 月に、本県と農研機構が合同で現地調査を実施したところ、同地のビワ新梢に本種の雌成虫および若齢幼虫の寄生を確認した。

本種は、平成 24 年に徳島県で初めて発生が確認されたビワの害虫で、平成 28 年には香川県、平成 29 年に兵庫県南あわじ市で発生が確認されている。

5. 形態及び生態

- 1) 成虫は小さなセミのような外観（写真 1）をしており、発生時期によって、体サイズや色彩がやや異なる。4～6 月に出現する春夏型（頭部から翅端までの全長 2.3～3.2mm）は、体色は淡黄褐色で前翅外縁に淡黄褐色の不明瞭な斑紋がある。10 月～翌 3 月に発生する秋冬型はやや大型（全長 3.0～3.8mm）で、体や前翅外縁の斑紋が暗褐色になる。いずれの季節型も胸部に黄白色の縦条や小斑紋がある。触角の長さは頭幅の 0.8～1.2 倍と、日本産の同属他種よりも明らかに短い。幼虫は扁平な楕円形で、黄白色をしており、節片（背面の硬化部）が暗褐色である（写真 2）。
- 2) 本種の生態は十分調査されていないため、年間発生世代数は明確ではないが、年 4～5 世代程度と推定される。井上（2015）によると、本種によるビワの被害は主に幼虫によるもので、幼虫は花芽の基部や果梗部、芽鱗の下などのすき間に隠れて生息して樹液を吸汁し、多量の甘露と白色ろう物質を排出する。5～6 月の発生密度が最も高く、この時期には成虫が葉裏の主脈にそって群生するが、その後著しく減少し、8 月の盛夏期には発生確認が難しくなる。ビワの花蕾が形成される 9 月下旬以降、花芽に多数の卵が観察されるようになり、翌春までビワ樹上で世代を繰り返しながら増殖し、春季の多発につながる。

6. 被害

果実肥大期から成熟期の5～6月に最も発生密度が高く、幼虫が多量の甘露や白色ろう物質を排出するため、これらが付着した果実や葉の表面にすすが発生する（写真3）。

7. 防除対策と注意点

- 1) 葉裏に寄生した成虫を探るか、白い排泄物や黒いすすの発生を目印として発生を確認する（5～6月が発生を確認するのに適している）。
- 2) 薬剤防除を実施する場合、以下の点に注意する。
 - ア 花房内部、枝葉のすき間や樹皮下などに隠れている幼虫にも薬剤が確実に付着するよう、丁寧な散布を心がける。また、ビワは葉の裏が細かい毛に覆われて薬液をはじくので、薬剤を散布する時は展着剤を加用する。
 - イ 春の果実袋かけ前に、スタークル／アルバリン顆粒水溶剤2,000倍（収穫前日まで/2回以内）を散布する。
 - ウ 秋の花房上でも幼虫が増加するので、この時期に登録のある薬剤を散布すると、ビワキジラミの発生を抑えることができる。

（出典）井上広光（2015）：植物防疫69、97-101

ビワキジラミ注意喚起リーフレット：平成29年度農林水産業・食品産業科学技術研究推進事業29022Cコンソーシアム作成（2018年3月）



写真1 ビワキジラミ成虫



写真2 ビワキジラミ幼虫



写真3 ビワキジラミによる果実被害

(写真は農研機構提供、いずれも撮影地は徳島県)

担当：和歌山県農作物病虫害防除所
有田川駐在 中
TEL:0737(52)4320